

「行ってきます」

主任司祭 晴佐久 昌英

「いしずえ」に転任の挨拶を書くのも、実はこれで二度目。前回は十五年前、助任司祭のつとめを終えて転任するときに書いた。

以前は何を書いたかと読めば、「新任地でも、きっと何かすばらしい神のわざが実現すると無邪気に信じている」とか、「教会の中にはまだまだ無数の種が眠っている。ぼくは、そこにいてだけで開かずの扉を開く神父になりたい。そこに世の初めから隠されていた種が『神のわざ』を浴びて芽吹くきっかけになりたい」などと、今に変わらぬおめでたい宣言をしていて、そのまま今回でも使えそうな内容である。悪く言えば成長がない、良く言えばブレがない。

ただしその中に、「高円寺教会において、ある人が生きる喜びを見つけたり、自らの可能性に目覚めたりすることが実際にあるという事実によって、自分にちゃんと『神のわざ』が働いているという実感をもてたのは、何にもましてうれしいことだった。」とあるのを読んで、気がついた。自分は、高円寺教会に育てられてきたのだ、ということに。

確かにあのころ、勝手気ままな助任生活をしながらでも、「福音を信じて宣言すれば、自分は神のお役に立てる」という自信を持てたのは、高円寺教会のおかげである。そしてこのたび、やりたい放題な主任生活ではあったが、「福音を信じて宣言し続ければ、今、ここに、神の国を実現できる」という、さらに決定的な自信を持てたのも、高円寺教会のおかげなのである。

この六年間、洗礼とミサを中心とした「秘跡の教会」、救いの福音を宣言する「みことばの教会」、みんなの家である「交わりの教会」を目指して、出来る限りのことをしてきた。至らぬことも多く、お詫びしたいことも多々あるが、悔いはないし、目指す教会にブレもない。

六年前のいしずえ復歸のときのタイトルは「ただいま」だった。当然今回は「行ってきます」しかないだろう。教会は「実家」だと説き続けてきたが、その間に実家の母を亡くして家は売り払われ、いつしか高円寺教会が本当に実家になってしまった。今回は長旅になるとは思うが、祈っていてほしい。行ってきまーす。